現代青年の自己像と生活の道程

—人格構造論試論—

Self-images and journey of life in Japanese young peple

—An approach to the model of personality—

教育心理学教室　高　取　憲一郎

Kenichiro Takatori* : Self-image and journey of life in Japanese young people——— An approach to the model of personality———. (Journal of the Faculty of Education, Tottori University, 〈Educational Science〉, 1984, **26** : 327-343)

1．はじめに

心理学が明らかにすべき重要な問題の一つに，「人格とは何か」というテーマが存在することは疑いえないことと思われる。事実，おびただしい数の人格心理学研究が行なわれてきたし，今後も行なわれるであろう。しかし，人間の本質は社会的諸関係の総体であるとする立場からの人格心理学研究は，ほとんどなされていないのが現状である。そのような数少ない研究の中に，乾孝（$1983_{a,b}$），中川作一（1979_a，1979_b，1979_c，1982），亀谷純雄（1981，1982）らの Rosenberg（1965）の自己評価テストと，Kuhn et al.（1954）の20答法を用いた現代青年の自己像類型化のこころみ，Séve（1969）の活動の時間分割に着目した人格の下部構造仮説，さらに坂元忠芳（1981）が紹介している**Рубинштейн**，**Ананьев**，**Логинова**，らの生活の道程としての人格への接近，などが含まれる。

本稿では，中川と亀谷が精力的に押し進めている青年の自己像類型化の方法と，**Логинова**（1978）の問題提起を具体化した **Кроник**，**Головаха**（1983）の人格の心理学的年令と生活の道程の調査法を用いることにより，現代青年の人格構造を明らかにすることを目的とする。

(1)中川たちの自己像類型化研究

中川たちは，乾孝の人格の構造モデルと，Mead（1934）の自我理論に基ずきながら，調査データを積み重ねている。

乾（1983_a）の人格構造モデルは，第1層：無条件反射（種属反射）の層，第2層：第1信号系による個体反射の層，第3層：第2信号系による人格反射の層の3つの層を下部構造として，その上部構造に自我領域，人間関係（家族・仲間）領域，大社会領域（抽象的人間関係）の3領域より成る自我構造が存在するとする。なお，上の3領域は乾（1983_b）では，オレ領域，仲間領域，社会領域となっている。中川たちが，Kuhnの20答法を用いて，「私とは？」，「私の仲間とは？」という質問を発しているのは，この3領域の前2つに対応している。

ところが，中川たちの自己像類型化の内的構造を理解するには，乾モデルだけでは不十分であって，Meadの自我理論，とくに"me"と"I"の構造連関を解明しておかねばならない。中川や亀谷がし

* Depertment of Psychology, Faculty of Education, Tottori University, Koyama-cho, Tottori, 680, Japan.

ばしば論じているように，彼らの理論的基礎にはMead自我論があるからである。

Meadによれば，自我とは，人間が誕生したときにすでにあるものではなくて，社会的経験や活動の過程で生じるものである。すなわち，その過程の全体およびその過程に含まれている他の個人たちとの関係形成の結果として，ある個人のなかで発達するものである。上述の他の個人たちとの関係形成の結果が，いわゆる「一般化された他者」であり，ミードの言うところの"me"である。この一般化された他者を個人がとり入れることが，個人の自我の発達にとって不可欠の前提であり，一般化された他者＝meと協調したり，軋轢をひき起したり，その限界を超克したりするものとして，いわゆる"I"が登場するのである。すなわち，自我には2つの側面，meとIがあり，meとは他者の態度の組織化されたセット，IとはmeIに対する反応である。meは，自我の社会的側面を，Iは個人的な自発性をあらわしているともいえるし，meは因襲的，慣習的な個人を，Iは主導的で，情況に対し主体的反応を行なう個人をあらわしているともいえよう。〔Meadの自我論については，滝沢正樹(1976) pp. 99—107にくわしい。〕

Meadの自我論は，ワロン（1983）Лурия（1974），さらにマルクスらの自我論・人格論とも接近している。ワロンによれば，自我は他者を内なる他者，すなわち第二の自我＝社会的自己として個人のうちにとりこむことによって形成される。また，ルリヤによれば，自己意識は，初めは外的状況へと向けられているが，集団的労働に参加していくなかで，他人の言動を評価したり，あるいは自己の言動が他人から評価される過程で，しだいに内面的なものへと向けられていく。さらに，マルクスの「資本論」のなかの著名なテーゼもつけ加えておこう。「見方によっては，人間も商品と同じである。人間は，鏡をもってこの世に生まれてくるのでもなければ，私は私である，というフィヒテ流の哲学者として生まれてくるのでもないから，はじめはまず他の人間に自分自身を映してみる。人間ペーターは，彼と等しいものとしての人間パウルとの関連を通してはじめて人間としての自分自身に関連する。だが，それとともに，ペーターにとってはパウルの全体が，そのパウル的肉体のままで，人間という種属の現象形態として通用する。」（資本論，新日本出版社版1巻，第1分冊，90—91ページ）

このような理論的背景の上に，中川たちは7種の自己像類型をモデル化している（図1）。対他開とは，他人との交わりを積極的に求めるタイプであり，対他閉とは，他人から逃れる傾向をもつタイプである。また，対自関与とは，自己に対する態度が前向きで積極的なタイプ，対自無関与とは積極性が出てこないタイプ，対自脱関与とは，自己から逃避するタイプ（たとえば，死にたいとか，消えてしまいたいとか）である。以上の対他と対自の5タイプを組合わせることによって，1から7の7つの類型ができあがるのである。対他と対自の単純な組合せ以外の類型，すなわち，(1)(4)(7)について，亀谷（1981）の説明から引用しておく。(1)は，対他志向が開であり，それが他者に媒介され，対自関与があるものであり，まれにしかみられないとされる。(4)は，対他における開と閉の揺れが，対自の面の関与と無関与の揺れに照応するものである。(7)は対他における開と閉の揺れが，対自の無関与と脱関与の揺れに照応するものである。以上の類型のくわしい内容については，中川と亀谷の諸論稿を参照していただきたい。

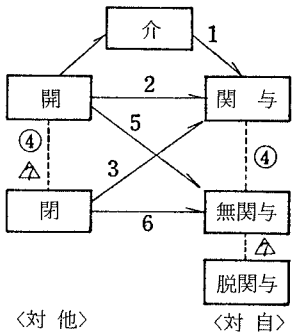

図1．自己像の7類型
（亀谷 1981 より）

(2)生活の道程と人生展望

Рубинштейн と Ананьев は，Bühler, Ch. が伝記を分析することにより人生の発達段階区分を行なった研究に大きな示唆を受けて，Bühlerを批判的に継承している。彼らのBühlerの方法への批判は，Bühlerには社会―歴史的視点がないということであり，その批判の上に立って，生活の道程（あるいは生活進路）における事件（событие）という概念が導入される。Рубинштейн（1946）によれば，「生活の事件とは，個人の生活の道程における結節点であり，転機である。そのとき，将来の時間を展望して何らかの決定を下すことにより，その人の将来の生活の道程が決定される。」（c．684）すなわち，Рубинштейнによれば，事件とは，将来の進路を人間が能動的に判断すべき人生の転機を画するようなできごとであり，「外的条件は内的条件を媒介して作用する」という有名な公式の適用を，ここにも見ることができる。また，Ананьев（1968）によれば，人格は歴史感覚，すなわち，歴史的過程の自覚と体験の深みによって特徴づけられ，いわば，歴史は人間の生活ドラマにおける基本的パートナーであり，社会的事件は人間の伝記の道標である。かくして，人間の個体発達におけるすべての事件は，歴史的時間の尺度上に配列され，人格構造の変化は，歴史的時間のカテゴリーなしでは理解することができない。Ананьев にとっては，人格研究は2つの意味において歴史研究である。第1に，人格の陶冶と生成過程の歴史的研究という意味で，第2に，時代・国家・社会構造・同時代者（人格としての個人が参加した仕事，時間，出来事の共通の参加者）の歴史的研究でもあるという意味において。

坂元（1981）が指摘するように，Логинова（1978）の論稿「人格の発達と生活の道程」は，以上の Рубинштейн, Ананьев の立場を継承発展させたものである。Логинова によれば，生活の道程とは，人格としての人間の生活の歴史であり，個人の発達の歴史である。人格としての個人は，社会的諸関係の体系の上で活動を営み，その個人の属する国の経済的・政治的状況，文化の型と水準，社会の心理的風土などの錯綜した状況により規定される生活様式を媒介にして，人格とマクロ環境＝社会との直接的関係が実現される。生活の道程の本質は事件（событие）により決定される。すなわち，性格の根本的変化とか人格の発達の方向やテンポの変化と事件とは密接に結びついており，事件とは，歴史上の基本的単位であり，とくに人間の伝記の基本的単位であるからである。そして，Логинова は，事件を3種類に分類している。(1)周囲の環境における事件，(2)人間の行動における事件，(3)内面生活における事件，である。さらに，注目すべきは，生活の道程のなかに労働の歴史が含まれるとする点である。個人の伝記のなかには，さまざまな活動が含まれるのであるが，そのような活動の主体の発達進路も伝記のなかに入りこんでくるのであり，なかでも労働行為はその主要な部分を構成している。

人格研究における伝記分析による事件の生活記録的意味という Логинова により提起された新しい課題は，最近，Кроник，Головаха（1983）により，具体化への一歩が踏み出された。彼らは，「もしもあなたの出生を証明する客観的記録の類が失なわれて，あなたの実際の年令が確認できないような事態になったとしたら，あなたは今，何才だと思うか？」という質問を発して，心理学的年令の自己評価をこころみた。結果は，実年令よりも若いとするものが55%，実年令よりも老いているとするものが21%，実年令と同じかあるいは±1年ぐらいとするものが24%であった。年代別にみれば，実年令より若く評価するものの割合は，30才以下では47%，30才以上では73%であり，年令の上昇とともにその割合が増加している。また，何才ぐらい若く見積るかということに関しては，30才以下では平均3.6才，30才以上では平均8.3才であった。このように，年令の自己評価と実年令の間には不一致があるわけであるが，その理由としては，(1)正確な自己計測器がないこと，(2)

社会的役割期待と現在までの自己の到達度との間の関係によると考えている。上の(2)の例として，次の調査結果があげられている。同じ職場の41人の男女の技術者（年令は23才～25才）を対象にして，年令の自己評価を行なわせた。なお，ソ連では23才～25才というのは結婚適令期であり，社会的には，結婚していることが役割期待として課せられているといえる。よって，独身者は，まだ役割期待を果していないと社会的には考えられており，自己の到達度のほうが役割期待よりは小さいということになる。その場合は，実年令よりも若くみなされることが多いと予想される。逆に既婚者の場合は，到達度のほうが役割期待よりも大きくなり，老けて自己評価する場合が多いことになる。結果を表１に示しておくが，以上の予想はほぼ支持されている。また，心理学的年令は，過去に消費された時間と，未来に消費されるべき時間との関係における人生展望のなかで，現在がどのように位置づけられるかによっても決定される。「何才まで生きると思うか？」という問に対する答は，50才から88才までの広範囲にわたり存在し，平均は69.3才であった。この数字は，ソ連の平均寿命とほぼ一致している。すなわち，気ままな思考の産物ではなくて，客観的な規準を反映していると考えられる。

表１　Кроник，Головаха（1983）の結果

家族の状態	年令の自己評価			
	若	同	老	
独身（男女）	１７	5	5	２７
既婚（男女）	3 $p<0.01$	7 N.S.	4 N.S.	１４

さて，**Кроник** たちは人格の心理学的年令を自己評価する方法として，次の３つを提案している。第１の方法は，「あなたの人生において過去・現在・未来に生じた事件のすべてを100％と仮定すれば，今日までにそのうちの何％が実現していると思うか？」と質問し，答えさせる。第２の方法は，生まれてから，死ぬと予想されるまでの一生を，５年間ごとに区切り，それぞれの５年間ごとに，事件の何％が実現したか，あるいはするであろうかを10点尺度で評価させる方法である。たとえば，現在35才の人が，65才まで生きると予想する場合を例にとってみよう。５才まで：５点，６～10才：５点，11―15才：６点，16―20才：７点，21―25才：10点，26―30才：10点，31～35才：５点，36―40才：６点，41―45才：６点，46―50才：５点，51―55才：５点，56―60才：４点，61―65才：３点，と評価しておれば，現在の35才までの７段階の合計点は48点，全生涯の合計点は77点であるから，実現率は48/77＝62％である。第３の方法は，２分割尺度法と呼ばれるものである。誕生から死までの一生の間に生ずる事件を想起させ，まず最初に，一生をその意味においても充実度においても２等分する事件，すなわち人生の時間における主観的尺度の½の点に生ずる事件を記入させる。さらに，¼と¾の時点における事件，次いで⅛，⅜，⅝，⅞の時点において生ずる事件を記入させる。以上の合計７つの事件を記入させて，次にそれぞれの日付を記入させる。その全尺度上で〈今日〉がどこにくるのかを測定して，実現率を出すわけである。例えば，½の点に今日がくれば，心理的時間の実現率は50％である。**Кроник** たちによれば，以上の３つの方法で測られた実現率は互いに高い相関があるとされている。

本稿では，以上述べてきた20答法による自己像類型と，事件を媒介とした生活の道程調査を用いて，青年をケースとしての人格構造論の試みを展開してみることにする。

2．調査Ⅰ（20答法による自己像類型）

方法：調査対象者は，鳥取大学教育学部１年生で，男30人（平均年令　19.0才，SD＝0.71），女26人（平均年令　18.9才，SD＝0.47）である。調査は1983年に行なわれ，集団的に実施した。中川や亀谷にならって，まずRosenbergの自己評価テストに回答させる。表２にテスト項目と選択肢をかかげておく。*1 採点方法については，亀谷（1981）にくわしい（p.25）。

表２　Rosenbergの自己評価テスト（亀谷純雄氏からの提供による）

a だいたい私は自分に満足している。	1．大いに満足している	2．満足している	3．あまり満足していない	4．少しも満足していない
b 時々私は駄目な人間だと思う	1．つよくそう思う	2．そう思う	3．あまり思わない	4．少しも思わない
c 私には長所がたくさんあると思う。	1．大いにそう思う	2．そう思う	3．あまり思わない	4．少しも思わない
d 私はふつうの人と同じくらいの力量はもっていると思う。	1．大いにそう思う	2．そう思う	3．あまり思わない	4．少しも思わない
e 私はじつは使いみちのない人間だと思うことがある	1．よくそう思う	2．そう思う	3．あまり思わない	4．少しも思わない
f 私はこれだけは誇りにしていいと思うものをあまりもっていない。	1．つよくそう思う	2．そう思う	3．あまり思わない	4．少しも思わない
g 私は少なくとも他の人たちと同じように生きる価値はあると思う。	1．もろろんそう思う	2．そう思う	3．あまり思わない	4．少しも思わない
h 私はもっと自分自身を尊重する気持になれないものだろうかと思う。	1．そう思う	2．そう思うこともある	3．それほどには思わない	4．そうは思わない
i 結局のところ私は人生の落後者だと思いたくなる。	1．つよくそうなる	2．そうなる	3．そうならない	4．少しもそうならない
j 私はいつも自分自身を積極的に生かしている。	1．大いに生かしている	2．生かしている	3．あまり生かしていない	4．少しも生かしていない

次に，20答法（TST）を行なう。「私とは？」，「私の仲間とは？」，「未来の私とは？」のそれぞれに対する答を20記入させる。１テーマあたり，15分間の記入時間を与える。

結果：Rosenbergの自己評価テストの結果は男女差がなかったので（χ^2=9.35，df＝６，n.s.）男女をこみにして図２に表わした（ただし女１名は未回収）。このテストは得点が低いほど，自己評価は高くなっている。自己評価３，４が最も多く，次いで５が多いというパターンは，亀谷（1981）の紹介している高校生の場合とよく似ている（図３）。Rosenbergの行なったアメリカ青年のパターンとは対照的であり，さらに中川（1982）の紹介しているわが国のある一流商社員の場合（図４）および一流につぐある生命保険会社員の場合（図５）とも対照的な分布を示している。また，同じく中川（1982）の紹介している首都圏内のある小学校教員の場合（図６）と比較してみれば，本調査の結果との類似性が見出されよう。教員志望の教育学部生と現職教員との間になにか共通性があることを示唆しているのか，あるいは大学１年生という時期特有のものなのかはよくわからないが，興味ある結果である。

次に20答法による自己像類型の結果を示そう。中川たちにならって，「私とは？」の答の分析から導かれた類型を内連関，「私の仲間とは？」，「未来の私とは？」の２つの答から導かれた類型を外連関として，内連関を分子，外連関を分母として表現する。類型分析の際は，中川らにならって，20答全体を総合的に考察しての判断とする。くわしい方法に関しては，中川（1983）を参照のこと。

＊１　Rosenbergの自己評価テストについては，法政大学教養部の亀谷純雄氏より，貴重な御教示をいただいた。記して感謝する。

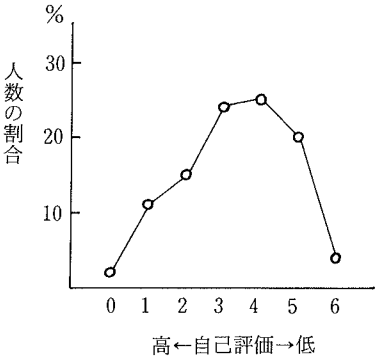

図2．Rosenberg自己評価テストの結果

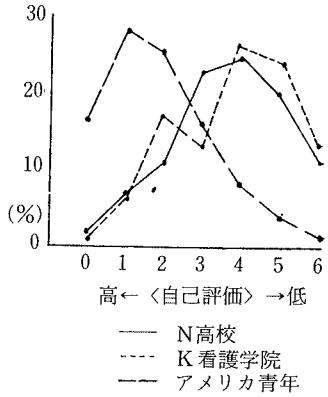

図3．亀谷（1981）の高校生，看護学院生，アメリカ青年のRosenberg自己評価テストの結果

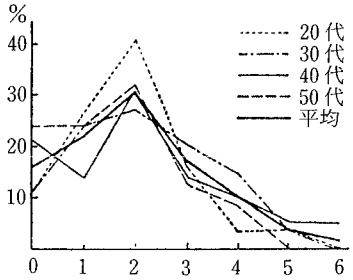

図4．中川（1982）のある一流商社員のRosenberg自己評価テストの結果

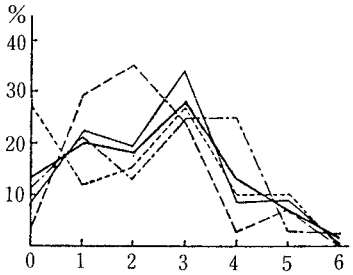

図5．中川（1982）の一流につぐある生命保険会社員のRosenberg自己評価テストの結果

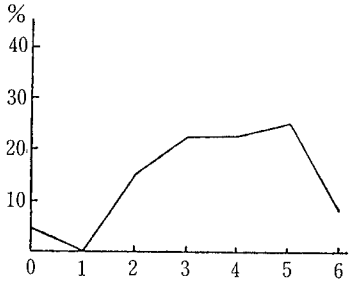

図6．中川（1982）の首都圏内のある小学校教員のRosenberg自己評価テストの結果

類型の具体例を表3に示しておく。また，表4には，内連関および外連関の類型別人数を示しておく。ここでxというのは，どの類型にもあてはまらないものである。内連関，外連関とも男女の間に差はみられない(内連関：χ^2=4.48，df＝7，n.s.，外連関：χ^2=11.00，df＝7，n.s.)。表から明らかなように，内連関，外連関とも類型5が最も多く，次いでxを除けば内連関では4，外連関では2が多い。このことから概略的傾向としては，調査対象者の集団特性としては，現在および未来において，他人との仲間関係においては協調的であるが，自己自身の生きかた，あるいは自己に対する態度においては積極性がみられない，という青年像がうかんでくる。ただ，外連関において，

類型2が内連関よりも多く現われていることから，未来への展望において自己自身に対する前向きの積極性をイメージするものが現われていることを示していよう。図7には，外連関を規準にして，自己態度の面で「関与」と「無脱関与」に二分化して配列したものを横軸に，Rosenbergの自己評価テストの結果を縦軸にして，自己評価と自己像類型をクロスさせたものを示す。自己評価と〈関与〉，〈x〉，〈無・脱関与〉との間には関連がみい出せないが（$\chi^2=18.36$，df＝12，n.s.），$\frac{5}{5}$の類型が全体として最も多いのが明らかである。これは，内連関と外連関のズレとして現象する現代青年の自己像典型（たとえば$\frac{4}{2}$，$\frac{5}{2}$など）とも，また青年期特有の不安定さを示す$\frac{4}{4}$の類型とも異なっており，本研究の対象集団に顕著な特徴である。亀谷（1981）が指摘するように，内外連関のズレという現象に自己像の再編成過程を予想することができるとすれば，本研究の対象集団は未来への自己像再編成過程が閉ざされているといえる。また，自己評価5において$\frac{6}{6}$，$\frac{6}{7}$，$\frac{x}{7}$，$\frac{7}{x}$の存在も気になるところである。

表3．自己像類型の具体例（文末のです，であるは省略した）

$\frac{5}{5}$の例（男）

私とは？	私の仲間とは？	未来の私とは？
1．鳥取県民	1．おもしろい人間	1．未知の可能性を秘めている。
2．田舎者	2．落着きのない人間	2．想像しがたい
3．貧乏者	3．遊び仲間	3．不安でいっぱい
4．なまけ者	4．一緒にいて退屈しない人間たち	4．教師になっているだろう。
5．勉強がきらいな人間	5．パチンコが好きな人間たち	5．平凡
6．遊ぶことが好きな人間	6．マージャンが好きな人間たち	6．いぜんとして鳥取にいる。
7．地味	7．車が好きな人間たち	7．田舎暮しに向いている。
8．性格が二重人格	8．勉強がきらいな人間たち	8．平和な生活を営んでいる。
9．短気なところがある人間	9．酒が弱い人間たち	9．自由を奪われている。
10．熱しやすくさめやすいタイプの人間	10．田舎者	10．家と職場とを往復している。
11．執念深い人間	11．貧乏者	11．趣味に生きがいを見い出している。
12．趣味がよく変る人間	12．なまけ者	12．疲れ果てている。
13．何事にもあきやすいタイプの人間	13．時として頼りがいのある人達	13．時間に追われている。
14．時々，みょうに冷静にいることがある	14．一見バラバラな集まり	14．年をとっている。
15．他人の視線が気になる人間	15．ワンパターンな考えしかもっていない人達	15．白髪になっている。
16．他人の言動が気になる人間	16．気のあった仲間	16．体力がおとろえている。
17．悩みやすい人間	17．やさしい仲間	17．気力がなくなっている。
18．物事を考えすぎることがよくある。	18．陽気な仲間	18．地味になってゆく。
19．くよくよ過去のことを考える傾向がある。	19．楽しい仲間	19．酒好きになっている。
20．結局，二重人格なのである。	20．結局，最高の仲間	20．でもなんとなく生きている。

$\frac{4}{4}$の例（男）

私とは？	私の仲間とは？	未来の私とは？
1．何よりも他人の目を気にする小心な人間	1．私を常に啓発してくれる先輩方	1．必ずしも定職についているとは限らない
2．ひどく気分屋	2．共に学び，行動する気概をもつ「ファイター」	2．よほどのことがない限り，結婚しないはず
3．極力積極的たらんと努める青年	3．輝くような個性で私の目をさまさせてくれる人	3．過去，現在同様，多大の問題を抱えた存在
4．常に自由を望みつつも秩序への憧れを秘めている。	4．ごく限られた範囲の人々	4．おそらくどこかで挫折を経験するはず
5．群への志向と反発という矛盾を抱えた存在	5．疎遠になりがちなかつての友	5．比較的社会の中で安定していない存在
6．好色にして女ぎらいという奇人	6．ほとんどが男性	
7．人見知りが激しく，未知の人間を警戒する性質をもつ。	7．実に多様な人間たち	
	8．人間くさい奴等	

8．熱し易くさめ易い典型的B型人間
9．責任回避術に長じた人間
10．精神的，物理的にも親から自立していない子供
11．先よみをしすぎて行動を自ら制限する傾向がある。
12．自分で思っているのとは逆に，所詮現代の若者の一人
14．どうしようもなく日本人
14．幼児的ナルシスト
15．典型的山陰人
16．単純に信じこむが，疑いだすときりがない人間
17．男としての資質に著しく欠ける男
18．デリカシーが傷つくことをおそれる人間
19．エゴイスティックな存在
20．万年「発展途上人」

9．おおむね話好きな人間
10．私に優越感も劣等感も与えてくれる人達
11．可能性がいっぱいの若者たち
12．けっして大勢ではない
13．これからもずっと仲間であるという保障はない
14．私の青春に欠くべからざる存在
15．私の心の支えの一つ
16．ほとんどが学友
17．貴重な存在
18．過去，現在，未来において私を変える存在
19．その中に「親友」がいるかどうかは判らない。
20．時としてうっとうしくもなる人達

6．親からほぼ完全に独立している。
7．自分の生き方を常に模索している。
8．いつまでも青少年の心でいたいと願っている。
9．肉体的にはほぼ健康
10．自堕落な生活に落ち入りがち
11．社交的ではないがつきあいは広い。ただし親しい友人は少ない。
12．責任ある立場を好まないが，それにつかざるをえないかもしれない。
13．経済的に常に不安がある。
14．イデオロギーに殉ずることはない。
15．様々のことに手を出す。
16．劣等感にさいなまれている。
17．県外で生活しているが常に帰りたいと望んでいる。
18．あいかわらずの活字中毒
19．面倒な人間関係に疲れている。
20．常にフラストレーションを抱えている。

$\frac{4}{2}$の例（女）

私とは？
1．女の子
2．子ども
3．しっかりしていない
4．前向きに生きていきたいと思っている人間
5．今の自分を変えたいと思っている人間
6．自分勝手
7．人に好かれたい。
8．社会性が乏しい
9．臆病
10．ものごとを悲観しやすい
11．小っちゃなプライドをもっている
12．恥をかくのがイヤ
13．自己顕示欲がある
14．意志力が弱い
15．けんかや争いごとは好きじゃない
16．仲間がたくさんほしい
17．ひとりぼっちに耐えられない
18．不満なことが多い
19．情緒不安定
20．ささいな事で動揺する。

私の仲間とは？
1．私を映しだす鏡
2．なぐさめられる存在
3．話し相手
4．おびやかされる存在
5．ライバル
6．私のことを高く評価してくれる
7．私にとってなくてはならない存在
8．私とはまったく別の人間
9．わりとしっかりしている
10．やさしい人が多い
11．いっしょに何かをしたいと思う
12．やさしくしてあげたいと思う
13．やさしくしてもらいたいと思う
14．心の支えになる存在
15．私の日常に影響を与える存在
16．真の意味で裸の自分をさらすことはできない相手
17．私の味方
18．けっきょく自分が大切だ
19．尊敬できる人達だ
20．未来に危かしさを感じさせない人たちだ

未来の私とは？
1．経済的に自立している。
2．精神的に自立している。
3．大人の女になっている。
4．都市に生活している。
5．家族と離れている。
6．友人が多くいる。
7．恋人と一緒に住んでいる。
8．1年の半分は海外にいる。
9．今とは異なった考え方をしている。
10．何かの仕事をもっている。
11．今よりもひとまわり細身になっている。
12．標準語をしゃべっている。
13．私の二世をもっている。
14．名前が変わっている。
15．視野が広くなっている。
17．固定財産をもっている。
18．過去をなつかしむ
19．まわりの人々を愛する。
20．自分というものをよくわかっている。

$\frac{6}{6}$の例（女）

私とは？
1．人間
2．18才
3．日本人
4．鳥取大学生
5．鳥取県に生まれ育っている
6．音楽が好き

私の仲間とは？
1．少人数
2．話してもつかれない
3．もの好きだと思う
4．いい人ばっかりだと思う
5．おもしろい
6．人間

未来の私とは？
1．年をとっている
2．性格はあまり変らない
3．働いている
4．長生きはしない
5．ひとりぐらしをしている
6．鳥取にはいない

7．教師になりたいと思っている
8．つまらない人間
9．わがままな人間
10．自己中心的な人間
11．無責任な人間
12．いつもぼーっとしている
13．不器用
14．感動することがめったにない
15．集中力がない
16．何をするのも無気力
17．めんどうくさがり
18．人と話をするのが苦手
19．大ぜいのいるところは苦手
20．冷たい人間

7．めったに話すことはない
8．時にうっとおしい
9．私の小ささを教えてくれる
10．あまり心配をさせたくない人たち
11．つきあうのが悪いような人たち
12．優しいと思う
13．個性的
14．かけがえのないもの
15．失いたくないもの
16．一生けん命生きていると思う
17．全面的に信頼している
18．かわっている
19．根が明るい
20．よくしゃべる

7．人とあまり交流がない
8．まずしいくらしをしている
9．結婚はしていない
10．仕事をしてもたいまんである
11．小さな部屋に住んでいる
12．いつも暗い顔をしている
13．ねてばかりいるたいまんな生活をしている
14．病院に入っている可能性が高い
15．ぼーっとしてすごしている
16．金がたまらない生活をしている
17．全く若さのない存在
18．いつもイライラしている
19．いるのかいないのかわからないような存在
20．はっきりいってまっ黒やみな存在

表 4　内外連関の類型別人数

〈内連関〉

	1	2	3	4	5	6	7	x	計
男子学生	0	1	1	6	13	1	0	8	30
女子学生	0	1	0	3	13	3	1	5	26
計	0	2	1	9	26	4	1	13	56

〈外連関〉

	1	2	3	4	5	6	7	x	計
男子学生※	0	4	0	5	12	0	0	8	29
女子学生	0	5	0	1	14	2	2	2	26
計	0	9	0	6	26	2	2	10	55

※無回答 1

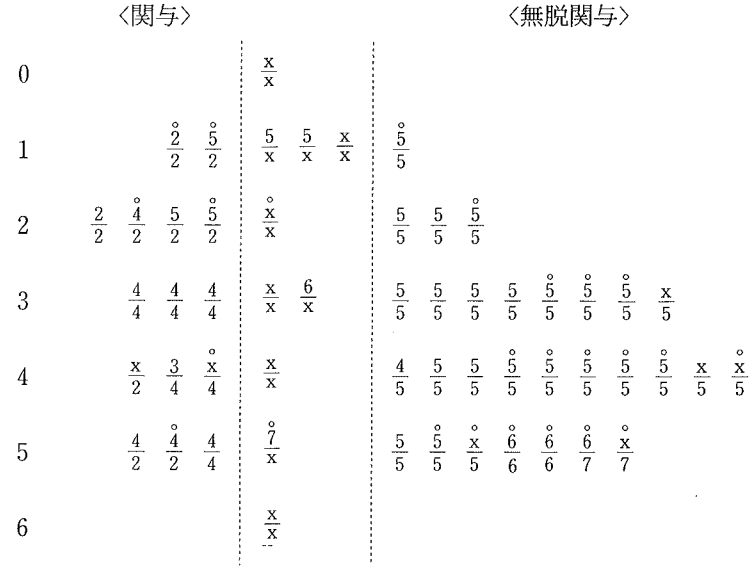

図 7．自己像類型と自己評価との相関（◦印は女子，男女とも 1 名ずつ欠けている）

3．調査II[*2]（心理的年令と生活の道程）

方法：Кроникたちの調査に示唆を得て,以下のようなアンケート調査を行なった。調査対象者は，調査Ｉと同じ学生(男子30人，女子26人)，およびその両親（父親38人，母親41人）である。学生の場合は，調査Ｉと同じ日時に，調査Ｉにひき続いて行なった。両親の場合は，学生にアンケート用紙をもち帰らせて行なわせ，後日回収した。表５に，調査対象者の年令構成を示しておく。調査項目は，(1)「いま仮に，あなたの年令を証明するいっさいのものの信頼性がなくなったとします。あなたは，自分はいま実際は何才であると思いますか？」，(2)「偶然的な事故や災害にあわないとすれば，あなたは何才まで生きると思いますか？」，(3)「誕生から死までの主要な事件（できごと）のなかで，一生を前半と後半とに分けると思われる事件を，½地点のところに記してください。同様にして，前半，後半をそれぞれ等分すると思われる事件，さらにそれぞれを等分すると思われる事件を記してください」の３項目である。第３の項目は，線分上に，½，¼，¾，⅛，⅜，⅝，⅞と記した地点に記入させていき，合計７つの事件を記させることになる（図８参照)。

表５．調査IIの調査対象者の人数と年令

	人数	平均年令	ＳＤ	範囲
男子学生	30	19.0	0.71	18—21
女子学生	26	18.9	0.47	18—20
父　　親	38	49.2	3.05	42—60
母　　親	41	46.3	3.31	40—53

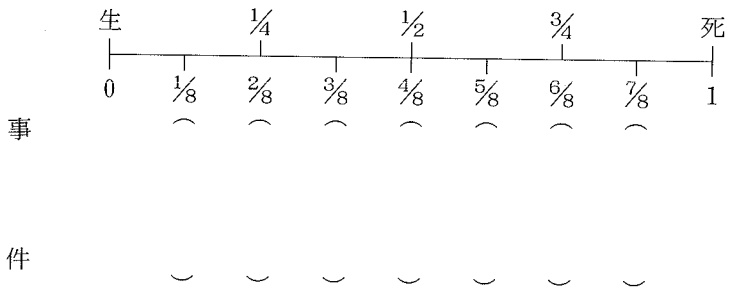

図８．調査IIの質問項目(3)の図

結果：(1)については，心理的年令のほうが実際の年令よりも若いとするもの，同じとするもの，老いているとするものの人数を表６に示す。全体的には有意差はみられないが(χ^2=10.72, df=６, p<0.10)，男子学生と父親(χ^2=8.04, df=２, p<0.05)および男子学生と母親(χ^2=6.70, df=２, p<0.05）の間には有意差がみい出された。次に，若いとするものは，何才ぐらい若いと考えているのかを，表７に示す。分散分析の結果は有意差がみい出されたので(F(3,90)=10.36, p<0.01)，さらにテューキーの法により群間の平均の比較を行なった結果，男子学生＝女子学生＜父親＝母親という関係がえられた。

(2)については結果を表８に示す。分散分析の結果は有意差はみい出されなかった（F (3,131)=1.96, n.s.)。

(3)については，以下の３種の分析を行なった。まず，誕生から死までの一生を前半，後半に等分する½点にどのような事件（できごと）がくるのかを分析する。結果を表９に示す。男子学生では

＊２　調査IIの一部は，1984年３月30日～４月１日に京都で開かれた心理科学研究会春の研究集会で，口頭発表を行なった。

表6．年令の自己評価の結果

	若	同	老	計
男子学生	17 (57%)	5 (17%)	8 (27%)	30
女子学生	17 (65%)	6 (23%)	3 (12%)	26
父　親	29 (76%)	7 (18%)	2 (5%)	38
母　親※	31 (78%)	5 (13%)	4 (10%)	40

※無回答1

表7．何才若く自己評価するか

	人数	平均	SD
男子学生	17	2.1	1.37
女子学生	17	2.8	1.46
父　親	29	9.2	6.43
母　親	31	8.8	6.82

表8．何才まで生きると思うか

	人数	平均	SD	範囲
男子学生	30	71.0	9.43	45—90
女子学生	26	70.8	10.06	50—90
父　親	38	73.2	7.74	60—95
母　親	41	75.1	7.19	60—90

結婚と就職がほとんどであり，女子学生では結婚が大部分を占め，父親では就職および仕事に関するもの（たとえば転勤，事業開始，係長，転職など）が多く，結婚，子や孫に関するものもみられ（たとえば長子誕生，子育て，子供の生長，子供の進学，孫の誕生など），母親では結婚，子や孫に関するもの，出産などが多くなっている。全体的に有意差がみい出され(χ^2=70.2, df=15, $p<0.001$)，各群間にもすべて有意差がみい出された(男子学生と女子学生：χ^2=13.5, df=5, $p<0.05$, 男子学生と父親：χ^2=28.35, df=5, $p<0.001$, 男子学生と母親：χ^2=28.35, df=5, $p<0.001$, 女子学生と父親：χ^2=27.00, df=5, $p<0.001$, 女子学生と母親：χ^2=12.15, df=5, $p<0.05$, 父親と母親：χ^2=29.7, df=5, $p<0.001$)。

表9．½地点に記入された事件

	結婚	就職	仕事に関すること	子・孫に関すること	出産	その他	計
男子学生	16 (53%)	9 (30%)				5 (17%)	30
女子学生	17 (65%)	1 (4%)			2 (8%)	6 (23%)	26
父　親	10 (26%)	4 (11%)	10 (26%)	6 (16%)		8 (21%)	38
母　親	20 (49%)			11 (27%)	4 (10%)	6 (14%)	41

次にЛогинова (1978) が事件を3つの領域，①周囲の環境における事件，②個人の行動における事件，③内面生活における事件，に分類しているのを少し修正して，①を大環境（たとえば国際的，全国的，地域的）におけるものと，小環境（たとえば家庭内での事件とか家族の死や誕生など）におけるものの2つの下位グループに分けて，全部で4領域に分類した。結果を表10に示す。大環境における事件は，学生では非常に少く，父親，母親では多い。とくに父親で多いのが特徴的である。具体的には，終戦，あるいは敗戦，開戦などの第2次大戦に関するものがほとんどであるが，その他に鳥取大地震，鳥取大火などの地域的大災害もあげられている。さらに少数ではあるが，石油ショックとか所得倍増論などの経済的事件もみられる。小環境における事件は，ほとんどが子や孫の誕生，子や孫の入学，結婚，就職，自立などであり，さらに両親や祖父母の死，家の新築などである。小環境におけるできごとは，とくに母親に多いのが特徴であるが(42%)，それは子や孫や夫に

関する事件を多く記述していることを示している。個人の行動における事件は，小・中・高・大学などへの入学とか卒業，入試，さらに就職，退職，転職，出世などの仕事と労働に関すること，結婚，出産，子育て，そして事故とか病気などである。内面生活における事件は，学生，とくに男子学生に多くみい出されるのが特徴であり，親にはほとんど出現しない。具体的には，「変愛」，「挫折」，「自我のめざめ」，「カルチュアショック」，「自分の存在を考える」，「老人的悟り」，「学校に行くのがいやになる」，などであり，父親にみられた唯一のものは，「神仏の信仰」であった。カイ自乗検定の結果は，全体的にも有意差がみられ(χ^2=121.68, df=9, p<0.001)，各群間にも有意差がみられた(男子学生と女子学生：χ^2=9.36, df=3, p<0.05, 男子学生と父親：χ^2=65.52, df=3, p<0.001, 男子学生と母親：χ^2=65.52, df=3, p<0.001, 女子学生と父親：χ^2=37.44, df=3, p<0.001, 女子学生と母親：χ^2=37.44, df=3, p<0.001, 父親と母親：χ^2=28.08, df=3, p<0.001)。

表10．4領域の事件

	大環境	小環境	個人の行動	内面	計
男子学生	2 (1%)	38 (18%)	153 (74%)	15 (7%)	208
女子学生		42 (23%)	134 (74%)	5 (3%)	181
父親	36 (13%)	78 (29%)	153 (57%)	1 (0%)	268
母親	16 (6%)	117 (42%)	146 (52%)	0 (0%)	279

次に小環境における事件と個人の行動における事件をさらに細分化して分類してみる。表11に示したように，労働（仕事）に関するもの（就職，退職，転職なども含める），教育に関するもの（入学，卒業，入試など），子や孫に関するもの(子や孫の誕生，入学，卒業，結婚，就職，自立など)，配偶者に関するもの（夫の死，病気，転職など），家の新築，両親と祖父母に関すること（死，病気など），自分の病気（事故も含む）に関すること，その他の9カテゴリーに分類した。表11からわかるように，労働に関することは男子学生と父親に多く，女子学生と母親には少ない。教育に関することは男女の学生が両親よりも多い。大学1年生にとっては，今までの人生のほとんどが教育期間であったのだから当然であろう。子や孫に関することが母親に多いことはすでにふれたが，この表からも明らかである。配偶者に関することが女子学生と母親のみにみられるが，これはほとんどが「夫の死」である。「家の新築」というのが父親に多いし，病気も父親に多くみられる。カイ自乗検定の結果は，全体的に有意差がみられ(χ^2=111.93, df=24, p<0.001)，各群間にも男子学生と女子学生の間を除いてすべて有意差がある(男子学生と女子学生：χ^2=8.61, df=8, n.s., 男子学生と父親：χ^2=25.83, df=8, p<0.01, 男子学生と母親：χ^2=60.27, df=8, p<0.001, 女子学生と父親：χ^2=43.05, df=8, p<0.001, 女子学生と母親：χ^2=17.22, df=8, p<0.05, 父親と母親：χ^2=51.66, df=8, p<0.001)。

表11．小環境と個人の行動の下位分類

	労働	教育	結婚	子・孫に関すること	配偶者	家の新築	両親・祖父母に関すること	病気	その他	計
男子学生	58 (30%)	56 (29%)	26 (14%)	30 (16%)		3 (1%)	6 (3%)	7 (4%)	5 (3%)	191
女子学生	32 (18%)	49 (28%)	26 (15%)	40 (23%)	5 (3%)	1 (0%)	9 (5%)	4 (2%)	10 (6%)	176
父親	73 (32%)	22 (10%)	30 (13%)	44 (19%)	1 (0%)	16 (7%)	15 (6%)	13 (6%)	17 (7%)	231
母親	28 (11%)	28 (14%)	40 (15%)	87 (33%)	10 (4%)	8 (3%)	19 (7%)	5 (2%)	28 (11%)	263

4．考察

本研究を2つの視点から考察してみたいと思う。第一に，20答法（TST）および自己評価テストを用いた自己像類型（調査Ⅰ）と，生活の道程および心理学的年令調査（調査Ⅱ）の結果から，現代青年（本研究ではとくに鳥取大学教育学部1年生）の人格構造として何が析出されてくるか，という点である。その場合，調査Ⅱにおける1世代ちがう父母の調査結果との対比が十分に検討されるべきである。第二に，調査Ⅱで用いた事件を手がかりにした生活の道程調査は，本研究でも世代間および男女間の差異を明瞭に浮かびあがらせたが，この方法の人格研究への適用可能性を探ってみたい。

(1)現代青年の人格構造（鳥取大学教育学部1年生の場合を事例にして）

20答法の結果より，鳥大教育学部の1年生の集団特徴としては，類型$\frac{5}{5}$の顕著な出現である(20人，37%)。類型5というのは，他人に対しては開いているが，それが対自態度関与へと照応せずに，対自無関与になったものである。つまり，協調的な仲間関係を保ちながらも，それが自分の生き方の積極性となってはね返ってこないタイプである。しかも，外連関・内連関ともに5ということは，現在から未来をみたときに，自己像の積極的な再編成過程が現われてこないともいえるし，逆に，未来の自己像類型が現在の自己像へとそっくりそのまま投影されているともいえるのである。いずれにしても未来へ向っての変化の展望はない。

さて，次の問題は，このような自己像イメージが心理学的年令および生活の道程調査の結果とどのような関連をもつか，ということである。

まず，心理学的年令についてであるが，男子学生の分布と父親，母親との間に有意差がみい出されたということは，男子学生では実年令よりも老いたとする者の割合が高く，若いとする者の割合が少いということである。すでにふれておいた社会的役割期待と現在までの自己の到達度の関係によって考えるならば，大学1年生の半ばの段階で，何らかの社会的役割を達成したとする者が，両親の世代に比べて多いということであろう。おそらく，大学入試という関門をくぐり抜けたことが，その一つの要因にあげられるにちがいない。しかし，男子学生の57%，女子学生の65%は，実年令よりも若いとみなしており，到達すべき役割期待としての結婚と就職をまだ達成していないことの現われと考えることができよう。すなわち，彼らはまだ未婚であり，学生の身分であるからである。父親と母親においては，若いとするものがそれぞれ76%，78%と学生より多くなっている。これは，すでに紹介しておいたソ連の結果とも一致するのだが，社会的役割期待と到達度の関係で説明がつかないように思われる。むしろ，50才近くになって自分の人生を考えたとき，自分が本当でやりたかったことをまだし残している。もう一度若くなってやり直してみたいというような願望も含んだ複雑な関係になっているのであろう。社会的役割期待というよりも，自分自身の人生目標に対して現在の到達度が不十分であるという関係で説明されるべきであろう。

次に事件の分類に関することにふれてみよう。½地点の項目では，男子学生の場合では結婚と就職が，女子学生の場合は結婚がほとんどであるが，父親の場合は，結婚，仕事に関すること，子供に関することなどであり，母親の場合は結婚が半数近くで，あと子供に関すること，出産などである。以上のことから，これから½地点を目ざす学生では，結婚か就職が最重要課題として位置づけられているのに対して，すでに½を過ぎている親の場合は結婚や就職以外にも多様な事件があげられているのが特徴である。また，このことは事件の4領域にも現われていて，学生では個人の行動に関することと内面の事件が親に比べて多いのに対して，親の場合は，環境に関することが多いのが特徴である。とくに，第二次大戦や鳥取大震災を経験したこの世代は，大環境の事件の内容において学生とは異なる特徴がみられる。また，母親では，子や孫や夫に関する小環境における事件が

きわだって多くなっているのも注目に値する。事件の小分類の上位2カテゴリーをみても，男子学生では労働と教育で全体の59%，女子学生では教育と子や孫に関することで51%，父親では労働と子や孫に関することで51%，母親では結婚と子や孫に関することで48%となっている。

以上のことをまとめると，学生の特徴は，個人を中心とした事件でほとんど占められており，他人との関係，社会集団（家族も含む）との関係，社会的大環境の事件との関わりがきわめてうすいということである。しかし，学生の間にも男女差があり，男子学生の場合は個人の枠内ではあるけれども労働に関することが目立つのに対して，女子学生の場合は結婚，出産，子や孫や配偶者に関わることが目立つのである。また父親の場合は，労働を中心としながらも，子や孫のこと，さらに社会的環境の事件にも関わっている。母親では，結婚，出産，子や孫や夫のことといった，いわゆる家庭的・日常的な人間関係との関わりが前面に出ている。

現代青年の特徴として，それはこの時期特有の発達的様相も混在しているのであろうが，個人主義的・安定志向型・マイホーム主義という類型が浮かんでくる。これは，20答法による自己像類型と基本的に一致しているのではなかろうか。

(2)生活の道程と人格構造

すでにふれてきたように，生活の道程調査は，世代間，男女間の差異をきわめて明瞭に浮びあがらせる。個人と社会との接点としての事件を手がかりにして，それら諸事件の4領域への分類，さらには小カテゴリーへの分類により，各世代の特徴が表わされるのである。Séve（1969）が時間の使用を指標として，人格の下部構造モデルを示しているが，本研究で問題にした生活の道程における事件は，Séveの時間使用と対応する点もあると思われる。日常生活においてどの部分に時間を多く消費するかが，生活の道程における事件として浮かび上がるできごとの強弱を決定するかもしれないからである。Séveは，学童の場合は基本的学習活動と個人的消費活動（たとえば日常的な家庭内での活動・レジャーなど）が多くを占め，学生では実社会で役立つための学習活動と個人的消費活動，労働者では社会的労働と個人的消費活動，老人では個人的消費活動が，それぞれの時間使用の大部分を占有することを仮説として提案し，トポロジカルに図式化している。本研究では，さらに男女差の要因が加わるわけだが，Séveにならって次のようなモデルを考えてみたい(図9)。この図に，本研究の事件の4領域の結果を当てはめてみれば，図10のようになる。まだまだ仮説的段階であり不十分なものであるが，今後，種々の年令段階，職業集団などのデータを蓄積していけば，内容的により豊かなものになる可能性もあろう。

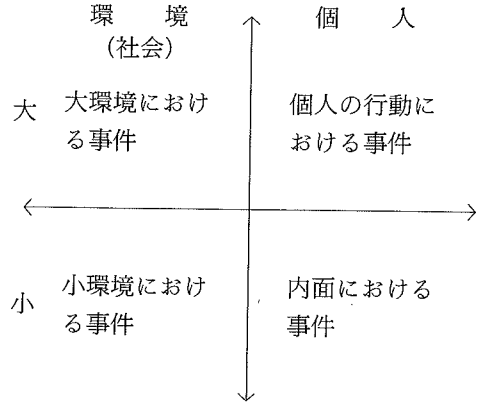

図9．環境（社会）と個人を関連させたモデル

最後に20答法にもふれておきたい。わが国では，乾，中川，亀谷たちの努力により，20答法を用いた人格研究がすすめられているわけだが，ハンガリーのПатаки(1983) もКовац他（編）の「認識過程と人格の心理学的研究」(1983) の中で，「自己像における認識的側面」という論稿で20答法を用いた研究を紹介している。Патакиはその中で，自己像（Я—образ）の問題は，マルクス主義心理学にとって解明の迫られている重要な問題であるとして，「私とは？」の問に対する20の答を分析している。20答を答えさせた後で，個々の被験者にインタビューして，まず①被験者の答えた各項目

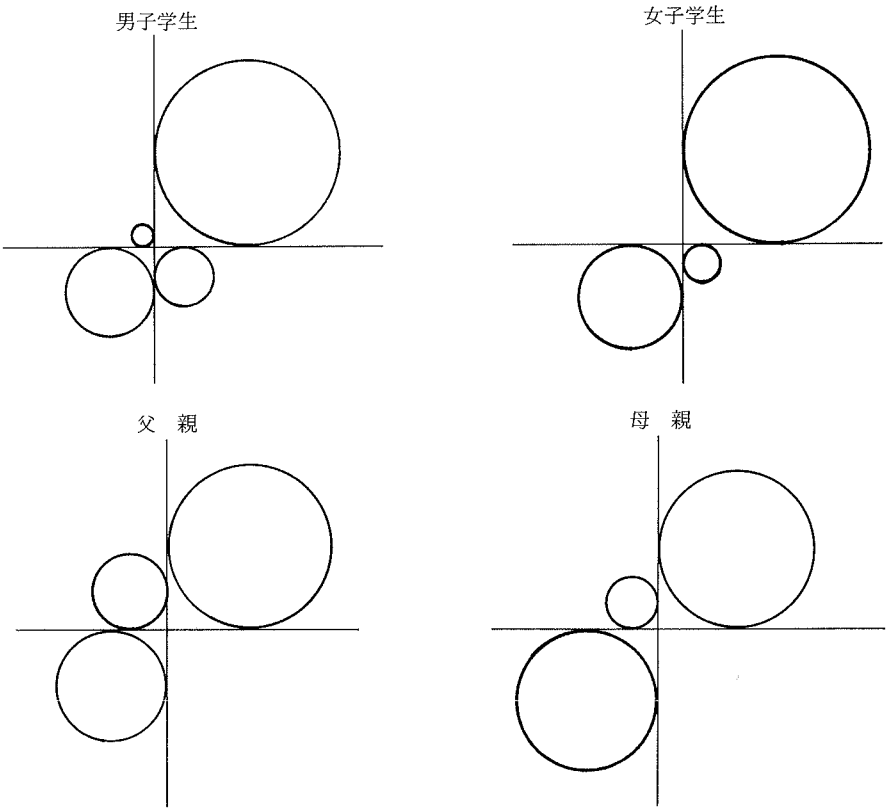

図 10. モデルの具体化

の重要性を 5 段階評定させ，②それらの項目の中で好ましくない項目はどれかを答えさせ，③最後に各項目の説明をさせた。被験者はハンガリーの大学生，労働者，中学生の 3 群である。その結果は，とくに③のインタビューの中で明らかになったわけだが，社会的大環境とか，所属集団や組織への言及が少く，身のまわりの身近な人間関係（たとえば両親，友人，配偶者，子供など）への言及が多いということである。Патакиのハンガリーの結果と本研究の結果には類似性が多く，社会体制のいかんを問わず同様の傾向が現われているのは興味深い。いずれにしても，20答法による自己像研究は将来も有効な方法と思われるので，さらなるデータの蓄積が求められるところである。

〈補遺〉

本稿脱稿後，布施晶子氏の「現代社会と家族———子育ての原点の再生をめざして———」（教育，1984年 3 月号，pp. 6 —15）を目にした。布施氏はその中で，ここ数年の学生像として，①全体社会の動きに対して，おそろしく鈍感な学生の増加（背社会志向），②社会性の欠除した学生の増加，③家族，とくに母親と密着した，親離れのしていない学生の増加の三点をあげ，総じて，社会的人間としての人間性を退化させ，衰弱させた学生像がうかびあがる，としている。さらに，その背景の一面を，現代社会における家族のありかたに求めている。示唆されるところが大きかったので，ここに付け加えておきたい。

文　献

乾孝　1983a　人格の構造，乾孝他　人格心理学，新読書社，1983，44—94。

乾孝　1983b　伝えあい心理学入門——人格の生涯発達をめざして——，いかだ社.

亀谷純雄　1981　現代青年の自己像の類型——課題と方法をさぐる——，法政大学教養部紀要，38号，1—25.

亀谷純雄　1982　自己像形成と集団の役割——現代青年の自己像の類型（II）——，法政大学教養部紀要，43，54—68.

Kuhn, M. H. & McPartland, T. S. 1954 An empirical investigation of self-attitudes, *American Sociological Review,* **19**, 68—76.

Mead, G. H. 1934 *Mind, self, and society.* Chicago : University of Chicago Press. 稲葉他（訳）　精神・自我・社会，青木書店，1973.

中川作一　1979a　現代青年の自己像について，佐藤毅他（編）　現代の社会心理，誠信書房，1979，193—205.

中川作一　1979b　孤独と連帯のメカニズム——現代青年の自己像をめぐって——，青年心理，12，67—76.

中川作一　1979c　青少年行政のイデオロギーと心理学，国民教育，39，56—66.

中川作一　1982　青少年と集団＝仲間との対比，青年心理，31，69—77.

中川作一　1983　自己像の類型と発達，乾孝他　人格心理学，新読書社，1983，95—136.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image.* Princeton University Press.

坂元忠芳　1981　ソビエト心理学における人格構造論の方法をめぐって，芝田（編）　マルクス主義研究年報，№4，1980年版，合同出版，1981，107—130.

Sêve, L. 1969 *Marxisme et théorie de la personnalité,* Éditions Sociales,　大津（訳）　マルクス主義と人格の理論，法政大学出版局，1978.

滝沢正樹　1976　コミュニケーションの社会理論，新評論.

ワロン　1983　浜田（訳）　身体・自我・社会，ミネルヴァ書房.

Ананьев, Б. Г.　1968　Человек как предмет познания. Л.，松野（訳）認識の対象としての人間，明治図書，1983.

Кроник, А. А.，Головаха, Е. И.　1983 Психологический возраст личности, Психологический Журнал, 4. №5, 57-65.

Логинова, Н. А.　1978 Развитие личности и ее жизненный путь.
В кн: Принцип развития в психологии. под ред. Анцыферова. М., 1978, с. 156-172.

Лурия, А Р.　1974 Об историческом развитии познавательных процессов. Изд. НАУКА,
森岡（訳）認識の史的発達，明治図書，1976.

Патаки, Ф.　1983 Некоторые когнитивные аспекты я-образа. В кн: Психологические исследования познавательных процессов и личности. под ред. Д. Ковач, Иед. НАУКА, 1983, 45-51.

Рубинштейн, С. Л.　1946 Основы общей психологии. 2-е, Изд. М.

Abstract

In study (I), by using TST (Twenty Statements Test) and Rosenberg's self-esteem test, several types of self-image of Japanese educational college students were analyzed. Type $(\frac{5}{5})$ was 37%. Type (5) (cf. Fig. 1) is the attitude which is open to others, but not participates to himself. So, type $(\frac{5}{5})$ is the one which is not changed in the future. As far as Rosenberg's test, Japanese students are most often distributed at point 3 and 4 (cf. Fig. 2). It is different from American young people of Rosenberg's result, and Japanese first-class businessmen (cf. Fig. 3, 4, 5), but is the same as Japanese elementary school teachers (cf. Fig. 6).

In study (II), by using the journey of life method which makes subjects report seven important events from birth to death (cf. Fig. 8), the differences of the structure of personality were analyzed. The results were : in the case of male students, there are many events in the field of labour, education and inner life, in the case of female students, education and children, in the case of fathers, labour and children, in the case of mothers, children.

Finally, the model of the structure of personality from the aspect of events was suggested (cf. Fig. 9, 10).

(昭和 59 年 4 月 30 日受理)